

操虫棍使いの日常

初代小人

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

大剣の攻撃は当てられないけど猟虫はマーキングなしで遠距離から当てられる。そんな下手くそすぎるハンターが苦労しながらモンハン4をプレイする。

操虫棍がバツタとか言うなら一回使ってみな！と思つた作者が投稿しています。

あの操虫棍使いが4Gでバルブレに帰ってきた!?

冒険はいよいよドンドルマへ！狩猟本能が加速する!!

※この作品はフィクションであり、実在の人物、及び団体には一切関係がございません

目次

バルバレ編

飛んで火に入る操虫棍!? | 1

井の中の蛙、大海を知らず | 15

ゲリヨスも泣かざれば狩られまいに…

22

小人に鳥竜玉 | 29

ハンターのハンターによるハンターの

ためのシヨートシヨート集 | 39

小人、双剣担ぐつてよ | 47

ランスはランサー | 59

回復薬がないならオトモに頼ればいい

じゃない? | 65

因果応報 | 76

謹賀新年 | 83

焼け石に回復薬 | 89

それから | 96

骨折り損のくたびれ儲け | 103

三十六計乗るに如かず | 111

二度あることは三度ある | 118

盛者必衰 | 124

終焉 | 132

ドンドルマ編

復活 | 138

バルバレ編

飛んで火に入る操虫棍!?

「さあつて、どんなクエストが出たのかな?」

その日、ハンターランクが6に上がったばかりだった僕はどこぞの超サ○ヤ人ばりにワクワクしていた…

が!?

「何やて工藤…」

次のハンターランクに上がるためのクエストにはジンオウガ亜種、ティガレックス亜種、リオレウス亜種、そしてブラキディオスといった錚々たるメンツが並んでいた。

「ちよい待ち、頭痛くなってきたわ…」

僕は現実逃避をするように村クエへ逃げ込んだ。

仕方が無いではないか。

そもそもジンオウガは上位に上がる際のキークエでさんざん叩きのめされたのである。

もはやトラウマレベルの苦手意識が台所の油污れ並に定着してしまっていた。そのの亜種なんぞ勝てる気がしなかったのとおりあえずパス。

ティガレックス：もなんか吠えて鬱陶しかった気がしたからパス。

となるとりオレウス亜種しかないな。

ブラキディオス？あんな面倒臭いもんやってられるか。

ということでした！

さて僕はどこにいるでしょうか!?（世界の果てまでイッテ〇風）

はいここです！ここはですね、天空山と言いましてですね、簡単に説明すると崩れ
そうな山ですね！

僕は今回オレウス亜種を狩りに、ここ天空山に来ております！

まあ口ケ的な事は置いておいて。

来てしまったよ天空山。

オトモアイルーは2匹ともアシスト。

おかげで初期位置は確認できた。

「はいはいエリア8ですね、今行きますよ蒼レウスちゃん」

ネットでリオレウス亜種が蒼レウスとも呼ばれることを知った僕はそんなことをつぶやきながら飛竜の巣であるエリア8へ向かった。

「こんにちは蒼レウスさん、死ね」

エリア8が狭いこともあり、到着するやいなや僕の存在を見つけた蒼レウスにそんな物騒な言葉を投げかける。

それに呼応するように蒼レウスは爆音と言つてもいいほどの咆哮を上げる。

その直前に僕は素早く体の向きを合わせた後、猟虫を飛ばして赤エキスを確保。

3DS本体の設定音量が大きくなっていたのもあつて思った以上にうるさい咆哮が鳴り響く。

「うっせえわ。お前だつてどーせレウスがちよい強くなっただけだろ?」

この後僕はこの発言を、死ぬほど悔いる事となる。

翼を広げ、こちらを超然とした様子で眺める蒼レウス。

僕はその姿を見て好機とばかりに跳びかかる。

その瞬間……であつた。

リオレウスが足を突き出し、鉤爪を打ち出す。

その先には宙を舞い、身動きの取れないハンター。

慌てた僕は空中で印弾を撃ち、その場で落下を図るも時すでに遅し。

鉤爪は無慈悲にHPを削り取り、毒状態にする。

その上気絶状態になった僕は数秒の間身動きが取れない。

その間も毒のスリップダメージは既に残り少ないHPをガリガリと削っていく。ボタン連打とレバガチャのおかげもあつて気絶はすぐに解けたのだが。

目に入ってくる翼を広げてこちらに突進してくる飛竜。

その一撃に僕のHPはついに0になったのだつた……

そこからの様子はダイジエストでお送りしよう。

「クソ、次はたたき落としてやグベア」

「ちよ、もう次死んだらクエスト失敗になゲボア」

「くつそ今度こそ勝つてやグウエイイ」

「分かりましたよ、飛ばなけりゃいいんでしょ？分かってますよ…ああでも我慢出来な
ゴッフ」

「待つてこれあかんやつやんサブタゲで帰ろ」

レウス「そうは問屋が下ろさんぞ！とりゃー！」

「デスヨネーシツテマシタヨー」

こんな感じで3〜4回クエスト失敗した頃に気づいた。

「あ、これあかんやつや。レウスがちよい強くなっただけなんて言つてすみませんでした。」

当時の僕の装備は上位のスキュラS一式。

「火耐性低いからだよね。知ってる。そうでしょ？」

都合よく責任転嫁してみたり。

ということで村クエ終盤のジンオウガを乱獲してジンオウS一式を揃えました。

まあその話はまた今度（するかも？）

そんな訳で再戦。

そもそも武器の絶対数が少ない操虫棍で、その時選択肢はゴア・マガラの最終強化一歩手前の武器かネルスキュラの最終強化済みの武器しかなかったのである。

Google先生は蒼レウスには龍属性攻撃より毒の方が聞くとおっしゃったのでネルスキュラの武器で出撃！

もうバツタはやめた。

僕は地につけて戦うぜ！

そう決めて、あまりダメージを受けすぎないうちに交戦中のエリアから隣のエリアに逃げ、回復薬を飲み、場合によってはベースキャンプで寝て休む。

そんな戦法をしていたら一度も倒れずに戦うことが出来た。

「よっしゃいい調子！このままなら勝てる！」

フラグは即回収された。

全長は唐突だった。

「ムムム…見えたニヤ！筆頭オトモにはお見通しだニヤ！」

そう表示された。

これはオトモマイルーのスキルの一つであるモンスター把握術である。

マップに、モンスターの場所や様子が表示されるのであるが…？

「なんだ？このトカゲマークのアイコン」

僕が不審に思ったのは、蒼レウスと戦っているエリアの隣によくわからないモンスターマークが出ていたことである。

乱入は十分ありえるクエストだったので深くは気に留めなかったのだが、数分後に交戦中のエリアに乱入してきた。

その姿はまるで食欲の権化。

口を大きく開け、ヨダレを垂らす。

「なんだあのモンスター!?! あんなもん見たことねえぞ!」

刹那、僕はその太い尻尾にしたたかに打ち付けられて倒れた。復活してからもその混乱の中よく分からずに死んでしまった。

「何が…起きた? アイツは何なんだ?」

後からわかった事だが乱入してきたモンスターはイビルジョーという最凶のモンスターであった。

どうにも困った僕はモンハンをしている友人である狩友(女)にLINEをした。

僕「リオレウス亜種ってどうやったら死ぬ?」

狩友(女)「希少種に比べればマシだよ」

根本的な解決になってないです。はい。

その後装備を見せてと言われたので写メを送った。

基本はジンオウSシリーズで、装飾品をつけた結果、発動スキルは力の解放+2、見切り+1、砥石使用高速化、雷属性攻撃+1、挑発だった。

武器はエイムofマジック。

すると狩友(女)は「装備は強いのかなあ…テクニックの問題かな?」

要するに下手というわけですな分かります。

そんなにオブラートに包まなくてもいいんですよ?却って悲しくなります。

ちなみにこの会話、蒼レウスとの戦闘中に行っている。

我ながらアホなことをやったと思う。

そうしてヘタレ戦法で蒼レウスの体力をジリジリと削っていく。

そして残り十五分弱の頃だっただろうか。

「捕獲可能率91%ニヤ!」

待ちに待った捕獲可能の合図である。

「これで勝つる!!!」

僕は油断せずに蒼レウスに攻撃を仕掛けていく。

そして残り十二分の時であった。

蒼レウスが足を引きずりながら数歩歩き、上空へ飛び上がる。その時、ペイントボールの効果が

消えた。

「ちよ、おま、ヤバいマズイクソツタレがああああ!!!」

残り12分。

僕はリオレウス亜種の居場所を見失った。

「チツクショーがー！ー！ー！」

僕は急いで蒼レウスの休眠エリアであるエリア8に向かった。

「せやかて工藤……」

しかしそこに蒼レウスの姿はなかった。

「ウツヒョー………」

パニックを起こした僕はそのままエリア4へダイブ。

「ニャーニャー♪」

そこはアイルーの楽園。

「ヒヤッハ………!」

そして某ナシの妖精のような奇声を上げながら走るケモ耳ハンターが1人。

そこに朗報がやってくる。

「ムムム…見えたニャー! 筆頭オトモにはお見通しだニャー!」

エリア8に敵影確認!

後から考えたところによると、僕が見失った後、蒼レウスはエリア3に移動。僕は即座にエリア8に移動したのが悪かった。

そして僕がエリア4に行ったタイミングでエリア8に蒼レウスが到着。

要するに入れ違いました。

ありがとうございます。

そして僕はそのテンションのままエリア8へ移動。
その時点で残り時間は五分を切っている。

僕はすぐに終わらせようとシビレ罠を寝ている蒼レウスの首元に仕掛ける…
そして蒼レウスはシビレ罠にかかって…起きない。

すぐに気づいた。

シビレ罠の設置場所間違えたー!?

仕方なく蒼レウスに攻撃を仕掛けて起こす。

休眠しているところを起こされて怒った蒼レウスは。
当然の行動に出る。

咆哮。

それは僕の行動を数秒止めるには十分で。

そしてその間に蒼レウスは一步前へ。

そしてシビレ罠が起動。

蒼レウスの動きを封じる。

そして僕の行動制限が解除される。

慌てて僕は捕獲用麻醉玉をぶん投げる。

しかし。

無慈悲にも蒼レウスはすんでのところでシビレを破壊し、自由に行動し始める。

どうやらオトモのシビレ罠で耐性がついていたようだった。

「嘘……だろ……」

僕はとりあえずエリア3に退避。すると蒼レウスは再び休眠に入った。

この時点で残り時間2〜3分。

再びエリア8へ行き、今度は大タル爆弾を蒼レウスの頭のすぐそばに仕掛けて印弾で爆破。

目を覚ました蒼レウスにもはやがむしやらにラッシュをかける。

そうしてから何回攻撃した時だっただろうか。

蒼レウスはついにその大きな体を倒し、二度と動くことはなくなった。

僕は達成感と疲れから、しばし放心状態になった後、思い出したように蒼レウスの死体から剥ぎ取りをした。

「は!？」

そして報酬確認画面を見て僕は奇声を上げた。

そこには見まごう事なきレア素材、「火竜の紅玉」があった。

Google先生曰く報酬での出現確率は5%だそうだ。

戸惑いつつアイテムをすべてボックス送りにする。

そして今しがた狩猟した蒼レウスのサイズが表示される。

大金冠だった。

井の中の蛙、大海を知らず

あれは…モンハン4を初めてまだ間もない時だっただろうか。
僕はナグリ村で足止めを食らっていた。

「ちよい待ち。落ち着け。分かった、分かったから。ちよつと待ってアカンでだから死ぬ死ぬ死ぬ」

「力尽きました…」

「報酬が700z減りました」

「報酬が0になりました」

「クエスト失敗！」

ありのまま今起こったことを話すぜ……

なんか赤くて牙が生えたカエルに追い回されたと思つたら三乙していた。

何を言ってるかわからないとは思うが僕にもわからない。

超ダメージとか高速突進とかそんなチャチなもんじゃねえ……もつと恐ろしいものの片鱗を味わつたぜ……

ゴホン……取り乱しました。

どうも小人です。

というか何だったんですかあのカエルは。

明らかにカエルという見た目じゃないんですけど？

せめてニョロ○ノくらいのが可愛さをください。

数刻前まで僕が追い回されていたモンスターの名前はテツカブラという。

ゲームクリア後からしてみれば楽勝であるものの、初見で相対するにはインパクトが大きすぎた。

というか、イカツいなあれ。

カエルのくせに猪みたいなの反り返つた牙生えてるし。

というか両生種という事は幼体はオタマジャクシなんだろうか。それも少し見てみたい気がするが…

おっとつつい現実逃避をしてしまっていた。

さっきので何回クエスト失敗したっけ？

5〜6回目くらいな気はするけども。

というかあいつってその辺の大型モンスターだよな？

難易度高くね？

え？僕が下手くそだからだって？

ハツハツハツ

また面白い冗談を…

え？何？冗談何かじゃない？

ワカツテマスヨジョークデスヨヤダナー

ハハハハハハハハ

行き詰まった僕は狩友（女）とは別の友人である狩友（男）に相談してみた。

僕「テツカブラの攻撃力が高くてあつという間に三乙します。どうしたらいいですか？」

狩友(男)「せやな…アイツは…殴れば死ぬな。うん。そんなに強いモンスターじゃないしな。」

どっかで見たことある展開ではあるが言わせてもらおう。

何の解決にもなりません、ありがとうございます。

というか狩友(男)さん。

殴れば死ぬってアンタ文化部のくせに脳筋なんですか？ちよつと信じられないんですけども。

あとその「そんなに強いモンスターじゃない」のに5回も失敗したって言うのはやはり下っ手くそだということを言いたいんですね。

蒼レウスの時と今回と言い、何か反応が似通ってる気がするの。

というか何？下手だなあと思ってる人に改めて下手って言ってる楽しい？ねえ楽しい？

泣くよ？号泣するよ？だばーっていう効果音付きで泣くよ？もう自分で「だばー」っ

ていいながら泣くよ？

そしてその後。

狩友（男）「とりあえず防具なに付けてるか教えて。」

またですか。というか時系列的にはこっちの方が先なんだけどね。

僕「下、下位のジャギギ装備です。ドスジャギギの襟巻とるのちよつと大変だったんですよ（震え声）」

狩友（男）「思ったよりも紙防御だったwww防具強化しなさい。」

僕「あ、はい」

止めて！小人のSAN値はもうゼロよ！

少年、防具強化中

僕「よし防具やれるだけ強化した。というか鎧玉系のアイテム使い切った。在庫少ないな」

ということまで地底洞窟。

エリア8で会敵、戦闘を開始します。

僕「とりあえずジャンプ！」

テツカブラ「はっはっは！かかったな！」

僕「何!？」

テツカブラ「秘伝マシン使って覚えた俺の奥義！いわくだけ！」

僕「あ、はいそれ違うゲームですね。帰ってどうぞ。」

テツカブラ「なん…だと…俺の必殺技が効かない…だと…」

僕「いや、防具強化して来たし、そしたらお前の火力思ったより低かったわwww」

テツカブラ「クウー！バカにしておっ！」

僕「あとな、いわくだけきって元ネタでも大したことない技だぞ？」

テツカブラ「え？嘘だろ？秘伝って付いてるから強いと思ってた…」

僕「もうひとつ言わせてもらうがな。」

テツカブラ「ま、まだあるってのかよ!？」

僕「お前乗りポイント広いから乗りやすいわ。飛んで殴ればいける。」

テツカブラ「何だと…」

僕「お前の秘孔は突いた。次のジャンプでお前はコケる。」
テツカブラ「く、来るなああああ！うわああああ！」

数十分後…

「テツカブラの大タル爆弾仕立てー丁出来上がり！お上がりよ！」

その後、テツカブラはハンターズギルドのスタッフが美味しく頂きました。

ゲリヨスも泣かずに狩られまいに…

突然ですが皆様に問題である。

集会所下位、及び村クエシナリオクリア前段階で製作可能な操虫棍は初期武器以外で何本でしょうか。

く読者思案中く

もう見るんですか？

せつかちなんですか？

そろそろ…ですか？

もうやばいですって！

すぐ下は答えですよ！

A. 二本。

いくら新武器だからといって少なすぎませんか？

チャージアックスもこんなもんなですかね？

重い武器使ったら即死するからあんま使ったことないから知らないけど。

ちなみに毒属性のスニークロッドと、龍属性のエイムオフトリックである。

村クエの★3のキークエストにゲリヨスの狩猟クエストがあるのだが、例のごとく僕はこれに困り果てていた。

というのも、狩友（男）に手伝ってもらって集会所でネルスキュラを倒して作ったス

ニークロッド（途中で妖怪イチタリナイが発生した。）が当時の最高の武器であったのがゲリヨスの高い毒耐性のせい、無属性で殴つてると同じ状態だったのである。

テツカブラの時に強化したジャギイ装備をあざ笑うように蹴り飛ばされて乙らされる。

そうやって何回もクエスト失敗した。

僕は毒が本当に嫌いだ。

そのトラウマはもしかしたらここでついたのかもしれない。

しかも操虫棍で攻撃中に光られたら本当に回避できない。

光る↓蹴られるもしくは光る↓毒になるの流れで致死率はほとんど100%であった。

てか無理じゃね？ジャギイさんにも限界はあるんですよ？知ってますか？

とはいえ勝たねばなるまい。

村クエ…

そこは、友人の助けを得られぬ本当の技量を試される過酷な場所。
今日も操虫棍が火を吹く…

r o u n d l ! f i g h t !

おおつと小人選手、開始早々打って出た！

猟虫で赤エキスを確保したぞ！

対するゲリヨス選手、パニック走りで迎撃する！

小人選手はそれを見て横に転がって避けるが毒液に当たってしまった！

慌てて解毒薬を飲もうとするもそこにゲリヨスが走ってきて…

小人選手をはねとばした！

小人選手はもう一度解毒薬を飲もうとするが…？

カツツカツツカツツへピカーン

ゲリヨスの閃光が炸裂した！

小人選手の動きを容赦なく封じる！

その間も毒のダメージは小人選手を蝕んでいるぞ！

ゲリヨス、その間に小人選手に近づいて…？

ついでだあああ！

小人選手ファイニッシュ！

まずは一乙…

同様にすぐ二乙させられてしまった僕。

そこで僕の意識は覚醒する。

狩友（男）は言った。

「攻撃が痛い？そんなもん当たらなければどうということはない」と。

そうだ、攻撃に当たらなければいいのだ。

ゲリヨスをよく観察する。

パニックダッシュは周囲に毒液をまき散らすのでダメージ範囲は高い。

少しオーバーなくらいにかわす。

振り向いて再度のパニックダツシユ。

ゲリヨスの走る軌道とL字に走って回避。

ゆつくりこちらに歩いてきた。

ついで。

僕は斜めに回避してゲリヨスの後ろに回り込み尻尾に攻撃を加える。

ゲリヨスは振り返って毒を吐く。

この毒はジャンプではよけられない。

従って僕はゲリヨスを中心に円を描くように回避。足元に入って攻撃する。

そうしていると、ゲリヨスが足を引きずって数歩歩いて、羽ばたこうとする。

僕「その手は桑名の焼きハマグリってな！」

ここに来て白エキスで高度を、赤エキスで空中の攻撃回数を強化したジャンプ攻撃がゲリヨスの背中に命中。

ゲリヨスは怯んで墜落した。

あとを追うように僕も落下。
すかさず乗りバトルに発展する。

ハンターナイフをぶつ刺してゲリヨスをぶつ倒す。

斬撃が特に通りやすい首に集中攻撃。

そして：

僕「よつつつつしやあああああ！」

クエスト成功。

やけに疲労感があった。

クエスト所要時間、40分。

当時の最長記録であり、後にリオルス亜種の討伐クエで更新されることとなるがまだ僕はそれを知らない。

そしてゲリヨスが思いのほか弱いことに気づいた僕はゲリヨスの下位装備を揃え、ネルスキュラに挑むのだった。

小人に鳥竜玉

現段階で作れそうな武器は作り終え。
リオレウス希少種の討伐を諦めた頃。

僕は八つ当たりのために集会所の簡単そうなクエストを探していた。(?!)

そして一つのクエストに目が止まった。

「いいクエストがあんじやーん♪」

そのクエストの名は「イーオスの親玉たち」である。

狩猟環境は安定、メインターゲットはドスイーオス2体の狩猟。

サブターゲットは竜の大粒ナミダ一つの納品である。

「ドスイーオス2体やろ？余裕で勝てるわww」

その油断が悲劇を生むことをまだ知らない僕はご飯を食べて出発する。
装備ジンオウスシリーズにシャドウウオーカーだったと思う。

「さてさてさーて」

某騎士団団長の口癖を真似しながら支給品ボックスから地図だけを取り出す。
上位クエストなので他のアイテムは少ししてから支給される。

「あ…」

そして気づいた。

「クーラードリンクじゃなくてホットドリンク持ってきたわ…」

全国のハンターさん、よくあることですよ。

「てか火山で体をホットにしてどうすんねんアホなん？焼け死にたいん？」

自分に自分でツツコミを入れないと自分のアホさ加減に呆れ果てて泣きそうだった。

しかもドスイーオスはエリア2とエリア8にいる。

どちらのエリアに行っても暑さでスリップダメージを受けてしまう。こんなことならクシャルダオラ装備で来ればよかった…

暑さでやられてしまう前に仕留めてしまおうと覚悟を決めてベースキャンプからエリアーに飛び降りる。

ドスイーオスー「！」

アハハ、コンニチハ、ドスイーオスサン、オゲンキデスカ？
エリアー2にいたドスイーオスが即行エリアー1に移動してきた。
もしかしなくても餌認定されてる？

ヤダナーハンターサンハオイシクナイヨ

エリアー1はそれほど暑くない設定なのか、暑さによるダメージは無い。
このエリアにこいつがいる間にサクツと殺つちまおう。
そう思った時だった。

ザツザツザツ

ドスイーオス2「！」

みなさんお揃いで、仲がよろしいようで何よりでございます。ええ。はい。

ドスイーオスは2体とも手下のイーオスを呼ぶ。

二つの群れから来ているからだろうか。

やたらと数が多い。

僕はAボタン攻撃も織り交ぜて周囲のイーオスを吹き飛ばしながらドスイーオスに攻撃する。

もはやどつちがどつちかよくわからん。

ドスイーオスが毒液を吐き出したのでかわすとその先でもう一体のドスイーオスの体当たりを食らった。

というかナチュラルに連携を取らないでいただきたいのだが。

そして吹き飛んだ先で毒液。

解毒しようと思ったその時だった。

「解毒薬、三個しかないやん…」

僕はパニックを起こした。

一乙した…

そしてそのタイミングでオトモは笛を吹き始め、支給品が届いた。もうなんか遅すぎる気がするんだよ…

僕「フハハハハ、小人ふっかーっ！」

エリアーに行くともたまたドスイーオスが一体だけいた。

「クーラードリンクは支給品でとった。もう何も怖くないわ！」

ドスイーオス2「そうですか、じゃあ2体同時でもいいですね！」

そう言わんばかりにやってくる2体目のドスイーオス。

僕「あ、ちょっと困りますん。」

ドスイーオス×2「知らんな」

僕「ですよね」

ドスイーオス1「ちょっと流石に今のは効いたわ。一時退散させてもらおかなつと」

片方のドスイーオスが足を引きずった。

ドスイーオス2「ちょっと待てどこいくんだ。」

僕「よっしゃ一体減らそうしよう。」

ドスイーオス2「待てと言っているんだ聞こえないのか」

僕「早く眠らないかな」と

ドスイーオス2「俺を！無視するな！」

ドスイーオスの、「たいあたり」。

しかし小人はかわした。

僕「よつしや寝たな今行くぞドスイーオスよ！」

ドスイーオス2「待っておくれよ」

僕「だが断る」

爆弾設置完了。

爆発圏内からの脱出完了。

武器の抜刀完了。

「照準良し！打てえー！」

大タル爆弾G×2の威力によってドスイーオス1はあえなく撃沈した。

僕「フツ、汚い火花だ…」

そして場所は変わってエリア7。

ドスイーオス2「相方の仇だ！喰らえ！」

僕「ああ、あなた一体くらいなら余裕で捌き切れるんで、大丈夫ですよ？」

ドスイーオス2 「と、思うじゃん？」

僕 「なん…だと…」

ドスイーオス2 「フハハハハ、出でよ！我が眷属達よ！」

ドスイーオス2 は大声で鳴いて仲間を呼んだ。

ドスイーオス2 「ハツハツハ！皆のもの！かかれえ！」

僕 「グツ！だが吾を倒すには至らぬわ！」

ドスイーオス2 「グヌヌヌ…」

僕 「こちらも本気を出そうではないか…」

ドスイーオス2 「何をする気だ…？」

僕 「秘技！heyタクシー！」

僕はドスイーオスの背中に飛び乗った。

ドスイーオス2 「や、やめろ、その武器は、伝説の「ハンターナイフ」！かの鎧竜の甲殻をも貫くという最強の武器ではないか！」

僕 「ご名答。とりあえず倒れとけや。」

ドスイーオス2 「ゞ (>y<;) ノうわああ！」

「乗りダウンを奪って頭部を集中的に攻撃する。」

「よっしやトサカ破壊〜♪」

落し物を拾う。

まさかの鳥竜玉が出た。

そして切り刻んで討伐に成功した。

余談ではあるがホットドリンクを使わずに討伐に成功した…

そして報酬確認画面。

一段目、二段目それぞれに鳥竜玉のアイコンが。

一回のクエストで3個も出た…

小人の烏竜玉所持数が7個になった。やったね！

ハンターのハンターによるハンターのためのショート ショート集

くキリンく

僕「ちっさ!?!こいつちっさ!乗りづら!」

数十分後…

僕「よっしや乗った!というか…」

「「「乗馬やん!」」」

くオトモとの連携…く

僕「いよっしや乗ったぞ!もうちよつとでダウン!」

オトモ「シビレ罨設置100%ニヤ!」

モンスター「シ、シビレビレく」

僕「乗りが…キャンセルされた…だと!？」

くジンオウガく

僕「よっしやダウンとった!角へし折つたるわ!

パキン!

「爪…折れた…」

くバサルモスく

僕「はい乗りダウンくでもこいつ攻撃弾かれるんだよなーあ、尻尾に攻撃通るんじやんく」

ザクツザクツザクツ

ブチツ

バサルモス「ギヤアアアアアア——(——。D。)

!!!!!!
」

僕「あ、尻尾切れた…ちつき!尻尾ちつき!w w w w w」

くアカムトルムく

僕「あ、やばい回復薬も応急薬も両方なくなつた死にそう…こうなつたら…」

僕「奥義、尻尾に虫！」

その後、体力全回復しましたとき。

くアカムトルムく

僕「古龍つてダメージ通つてるか分かりづらいから嫌いなんだよな…」

グチユツ

僕「ちよ!?!今生々しい落としたよ!CAPCONそんな所までリアルにしなくていい

よ!?!」

くアカムトルム3く

「ヤバイまたHP危険域！再び虫をパシろうそうしよう！」

ブチツ

アカムトルム「ギヤアアアアア——（———。D。）

!!!!!!
」

僕「猟虫つて…たくましいな…」

くゴア・マガラく

僕「動きが止まった！チャンスじゃんか！小人ジャンプ！」

ゴア・マガラ「フハハハハ喰らえ、渾身の一撃…」

僕「なん…だと…」

ゴア・マガラ「どうも、すみませんでしたア！（土下座）
ドーン！

僕「（*、□□□□…；*…；カハツ）」

ゴア・マガラ「かーらーの？（○、□、）∥3フウ…（ブレス）」

僕「グアツハア…」

ゴア・マガラ「どうだ、参ったか！」

僕「あのさ…」

ゴア・マガラ「何でしょう？」

僕「さつき、渾身の一撃って言ったよね？」

ゴア・マガラ「あ、はい、言いました。」

僕「さつきの一撃じゃなかったよね？」

ゴア・マガラ「あ、はい」

僕「そもそもさ…(ry)」

ゴア・マガラ「(・ω・、)」

くテオ・テスカトルく

テオ「超^{スーパーノヴァ}新屋！」

僕「どんなに強い攻撃も…」

僕&狩友(男)「当たらなければどうということはない！」

テオ「俺の超ミラクルスーパーウルトラハイパーファンタスティック必殺技が…(・ω・、)」

くポポく

僕「大人しく生肉を差し出せや！」

ポポ「だが断る！」

「ポポノタンを入手しました。」

「ポポノタンを入手しました。」

僕「ゞ（＞▽＜；）ノウわああ！」

ゝ捕獲クエストゝ

僕「罫使い切ってもたから調査しよかな〜つと。」

「調査に失敗しました。」

「もえないゴミを入手しました。」

僕「オ・ワ・タ…」

ゝ討伐クエストゝ

僕「やばいな、このモンスター強いから捕獲しようそうしよう。」

小人、罠設置中…

罠設置中…

罠設置中…

ガスッ

「力尽きました…」

「報酬金が0zになりました」

「これ以上復活できません」

「クエスト失敗…」

小人、双剣担ぐってよ

さて、唐突ではあるがハンターランク上限解放という制度がある。

簡単に言えば今までは緊急クエストをクリアしないと上がらなかつたハンターランクが、集会所クエストをクリアした時に貰えるハンターランクポイントを集めることで上がるようになるということである。

ハンターランクを上げていくことで開放されるクエストもあつて、それが無いと装備を作れなかつたりもする。

僕はハンターランクをまだ開放していない：

ハンターランク7に上げて、第1話の蒼レウス討伐に続いてティガレックス亜種を討伐。

ジンオウガ亜種と爆弾魔な碎竜は狩友（男）と共に撃破した。

そして緊急クエスト。

「蛇王龍」の別名を持つダラ・アマデユラである。

そして当の小人といえは…

「え？蛇？ただの蛇なんでしょ？どーせガララアジャラの進化系みたいなもんでしょ？」

なめくさっている。

というかクシャルダオラをソロで殺した直後だからといって調子に乗りすぎな気がするが…

とりあえず狩友（男）と行ってみた。

ダラ「俺を見ろ、この体をどう思う？」

僕「えつと…すごく…おおきいです…」

体長は4.4km超え。

はつきり言ってもうでかい以外に感想が見つからない。

武器はダラ・アマデユラの弱点属性である龍属性の武器、Theチェイサー。

もはやこれ以上のことは出来ないのではないかというくらいに装備を固めて挑戦。

ダラ「小わっぱが俺を狩るつもりか？片腹痛いわ！つてか俺の腹つてどこだよ…」

僕「で、ですよね〜（震え声）」

勢いよくブレスが吹き付ける。

初見で緊急回避のタイミングを合わせるのは僕の実力では出来ず…

狩友（男）「小人おおおー！」

「力尽きました…」

とりあえずこれは無理だということで狩友（男）に指示を仰いだ。

曰く。

「操虫棍つて乗つてダウン取るのが仕事なのにそれが出来ないんじや雑魚じゃね？」

ひどい言われようである。
でも事実だったので仕方なく受け止めた。

狩友（男）「武器変えれば？」

僕「双剣しか使えないですが大丈夫ですか…（震え声）」

狩友（男）「まあた手数武器かよ…似たりよつたりな武器ばかり…まあ操虫棍よりマシだろ。」

僕「そうですね…」

そういうことで僕は双剣の制作に移ったわけであるが。

龍属性の武器って全然ないです。はい。

なんかね、竜人商人さんのところで交換できるラオシャンロンの素材で作れることは作れるんだけどね？

最終強化にダラ・アマデュラの玉がいるという。

ダラ・アマデュラを殺すためにダラ・アマデュラの素材がいるとは本末転倒だな…

ということまで考えた結果。

僕はジンオウガの双剣を作りました。

ジンオウガマラソンせなあかんのかな：玉要るし：とか思ってたら一発で出ました。
最近引き運がいいですね。

というのもダラ・アマデユラの第二弱点が雷なんですよ。
しかも分岐させたら龍属性と雷属性を両立できるという。

そして今の僕のスキル構成は、ジンオウSシリーズに元からついている業物、力の解放+2、雷属性攻撃+1。

装飾品と護石でつけた心眼と龍属性攻撃+1。

端的にいうとこの双剣ととても相性がいい。

心眼と業物を両立することによって連撃を繋げながら刃こぼれを減らす。

そして属性の攻撃力は雷が350、龍が330である。

完全なるダラ・アマデユラ用の装備の完成である。

そして決戦の日。

僕「なああ狩友（男）…」

狩友（男）「ん？なんだ？」

僕「ひと狩り行こうぜ！」

狩友（男）「お、そうだな。」

僕が勢いよく言いすぎたのか狩友（男）は若干たじろいでいた。というか引いていた。

僕「ということでも来たぞ…来てしまったぞ…千剣山…」

狩友（男）「とりあえず頑張ろ」

僕「うん。勝ちたいしな。」

ダラ「俺を無視すんじやねええええ！」

僕「こんにつちわ、ダラちゃん♪私が殺す♪」

狩友（男）「ちよ…そのメロディーはあかんわw」
ドン引きされたのでネタをもっかい突っ込もう。

僕「ダラ・アマデユラ…殺^ヤ・ラ・ナ・イ・カ」

狩友（男）「もうこいつ止まんねえなおい」

ダラ「シヤアアアアア！（舐めんじゃねええ！）」

ネットを見たところ、尻尾から攻めろと書いてたのでとりあえず尻尾へレッツゴー！

鬼人化して剣を振るう。

僕「あ、メテオブレス（隕石みたいなブレス）来るで〜」

狩友（男）「え、ちよ、ま…」

ドカーン

数分後…

「狩友（男）さんが力尽きました…」

僕「え、狩友（男）乙ったん？」

狩友（男）「乙りましたー」

狩友（男）…ハンターランク70なのに…

その後、ハンマーを担ぐ狩友（男）とは別行動して僕は頭を見ながらあまり動いていない手などの部分を鬼人化して切り刻んでいた。

僕「ブレス（薙ぎ払い）来ます！」

狩友（男）「あいよー」

タイミングを図って…

ブラキのようなジャンピング土下座！

ノーダメージ！

僕「よっしや回避できた！」

狩友（男）「こっちもや」

ダラ・アマデユラが山に巻きついたので僕と狩友（男）は体に登る。

僕「対巨龍爆弾いきまーす！」

狩友（男）「分かった」

ダラ・アマデユラの体の上で四つの爆弾が爆ぜる。

ダラ「流石に…今のは…痛かった…」

僕「よっしやひるんだ！」

ダラアマデユラの動きが止まる。

僕は何度したかわからない鬼人化をして高速で斬撃を浴びせる。
なんとか鬼人強化に成功。

狩友（男）「よっしや爪破壊！」

僕「GJ！」

ダラ・アマデユラが怯みから脱出してゆっくりと体をもたげた。

僕「食いに来るで！（嘔みつき攻撃のこと）」

狩友（男）「え、ちょこれはあかんど、避けられへんぞ。」

「狩友（男）さんが力尽きました…」

僕「ええええ?!ハンターランク70様は戦犯か?戦犯なのか?」

狩友（男）「おうそうや!」

この人、開き直り始めましたね。ええ。はい。

狩友（男）「でもそろそろこいつ弱ってきてるんちゃう?」

僕「え? そうか? 古龍はホンマにようわからんうちに殺されるか殺すかしてるから

なあ…」

狩友（男）「いや、弱ってるやろ? もうじきに死ぬや」

「メインターゲットをクリアしました」

やっぱりな、と脱力する狩友（男）と嘘やろ!?!と驚く僕。

とりあえず2人で剥ぎ取りを始める。

狩友（男）「ふう…剥ぎ取り終わった…」

僕「え? こいつ胴体と口の中剥ぎ取れんで?」

狩友（男）「嘘やろヤバ…」

「クエストクリア!」

狩友（男）「大損したわ……」

リノプロスの気持ち分かる大事な体験を出来ました。
おしまい。

??? 「そうはさせんぞー！」

僕 「誰だ!？」

??? 「俺は今お前が手にしているランスだ。凸槍とでも呼んでくれ。」

僕 「で、なに？」

凸槍 「俺の出番をたった200文字で終わらせるつもりか？」

僕 「だってぶっっちゃけこのまま続けてもひたすら不毛だよ？」

凸槍 「そうは言わずに！読者様の前だろう？」

僕 「(・ロ・) チッ」

上のやりとりは僕の空想です。

僕はランスと意思疎通するような痛い人間じゃないです。

操虫棍とは仲良しだけど：

そんなわけで闘技場へ。

ドスジャギイ「エモノダ、ゴハンダ！」

僕「なにそれ怖い、ハンターさん美味しくないよー（片言）」

ドスジャギイ「タツクルダーフキトベー！」

僕「バーリア！」

キン！

僕「突き！突き！」

ドスジャギイ「イタイ、イタイヨー！」

ドスジャギイのタツクル。

小人はどうする？

△かわす

△ガード◀？

小人はガードをした。

僕「尻尾が後頭部にクリティカルヒッツ！」

ガードすり抜けはあかんと思うねん：

さて、操虫棍とランスの共通点をご存知だろうか？

ジャンプ攻撃ができることである。

僕はいつもやっているジャンプ攻撃に賭けることにした。

では今度は逆に操虫棍とランスのジャンプ攻撃の違う点を考えてほしい。

操虫棍のジャンプは武器を支えにして飛ぶ。

陸上競技に例えれば棒高跳びの要領である。

一方ランスのジャンプといえは突進の助走を用いての跳躍、即ち走り幅跳びの要領なのだ。

つまるところ、同じジャンプ攻撃でも全くと言っていいほど違うものなわけ。

僕「よっしゃ小人ジャンプ！からの攻g」

ドスジャギイ「そのけそのけオイラが通る！」
僕「ガツハツ……」

タイミングを逃して体当たりを食らってしまった。
何回やっても上手くないかな……

い。
その後もガードをしながら張り付いて攻めようとするがやはり思う通りには動けな

僕「とりあえず突き突き！」

ドスジャギイ「フグウ！」

僕「よし倒れた突進！」

ドスジャギイ「起立！攻撃！」

僕「フグウ！」

ドスジャギイ「どうした？フグ毒にでも当たったか？」

僕「ぐぬぬ……テトロドトキシン！」

その時だった。

「メインターゲット達成！」

「クエストクリア！」

ここ、これがテトロドトキシシキシンパワーなのだろうか……25分針だったことをここに報告しよう。

回復薬がないならオトモに頼ればいいじゃない？

はっはっはア！

みなさんこーんにーちはー

あれ？返事が聞こえないよ？

もう1度言ってみよう。

こーんにーちh…

GYAAAAAAAAAAAAA！

「力尽きました」

「報酬が3800z減りました。」

「報酬が0になりました。」

「これ以上復活できません。」

僕「あ、やっぱ死んだw」

説明しよう。小人は陽炎Lv1さんのリクエストに挑戦すべく回復薬を持たずにテイガレックスに挑み、瞬殺されたのだ。

ちなみに装備は小手調べのつもりで、最近作ったEXレウスシリーズ一式と、これまた最近やっと作れた渾身一体の薙刀ヤマタである。

元からついていた匠とハンター生活はそのままに、ボマーをつけて、バットスキルであるスタミナ回復遅延を打ち消した装備である。

しかし、あまり強化が進んでいないため、防御が395しかない。

僕「やっぱもつと防御高くて弱点武器担がな無理かな…」

そんなことを言っていたら隣にいた妹に「当たり前やん」と馬鹿にするような目で見られた。

解せぬ。

テンテテテンテナー

「ジンオウSシリーズ」（間延びしたダミ声）

防御は430越え、元から付いている雷攻撃強化＋1が雷属性を弱点とするティガレックスに好相性。

さらに武器は蒼の稲妻。

武器の効果で防御が450に達する。

これ以上の装備はない！そう確信しながら氷海へ赴く。

ティガレックス 標 的はエリア3に居る。とりあえずホットドリンクを飲んでから向かう。

今回は回復薬縛りである。

少しのダメージが命取りとなり、そしてオトモによるささやかな回復が力になる…

少年移動中

エリア3に到着！

ポポさんがとても慌てておいでだね☆
今助けてあげるね！

とりあえず…

突撃!!

僕「あ、突進してきた」

グチュア

僕「毎度毎度この音がリアルすぎると思うんだよな…とはいえもう喰らわないように
しないとつて危な！」

回転攻撃を間一髪で回避。
そして吠える。

しばらくしてからジャンプ攻撃からの乗りに成功！
すると？

オトモ「シビレ罠設置100%ニヤ！」

慌てる僕。幸い乗りダウンを取ることに成功。
尻尾をしばき回す。

激怒して二連続で吠えるテイガレックス。

距離を取りながらシビレ罠に誘導。

そのタイミングでトリプルアップ状態が解除される。

僕「やっべ、赤エクスだけは確保しねえと…行け！オオシナト！」

オオシナト「防御は大事、黄色エクスですよ」

僕「ちよつと今欲しいのそれじゃないんだよな…もっかいお願いね…」

オオシナト「早さは正義、白エクスですよ」

僕「惜しい！せめて赤エクスがあれば火力が上がったのに…」

テイガレックス「カバチ…」

僕「え？なんか言った？今忙しいんだけど」

テイガレックス「何をカバチタレとるんじゃワレエ！イキがるんも大概にしとけや
！」

GYAAAAAAAAAAAAAAAA

あ、はいすみませんでした。

ところでその咆哮はどっかの災禍の鎧の真似なのかな？

テイガレックス「煩いわ！尻尾食らって黙つとれや!!」

僕「必殺☆綺麗な緊急回避！」

テイガレックス「ダニイ!」

僕「からの尻尾尻尾お！」

ティガレックス「や、やめろ、そんなに、やられたら」

ブチッ！

ティガレックス「アッー!!」

僕「あのさ」

ティガレックス「なんやねん」

僕「微妙にソツチ方面に持っていくのやめて？」

ティガレックス「そんな事より…」

僕「ん？」

ティガレックス「尻尾クツソ痛いんじやー！ー！死に晒せー！」

僕の体力は、尻尾切断を代償に、削り切られてしまった。

狩場某所、BC

「小人復活！」

テイガレックスに突撃！

「ネコ式応援楽団とはボクらのことだニヤ！」

体力値、スタミナがそれぞれ+50される。

よっしゃいけいけ！

く10分後く

「力尽きました」

「報酬が3800Z減りました。」

二乙ですねワカリマセン

と、とりあえず突撃イ！

くさらに数分後く

僕「あ、やばいHPほぼ残ってない、これ一撃くらったら死ぬ」

ティガレックス「ほんまに…しつこい…やっちゃのう…」

足引きずったよっしゃ！ということでペイントボールをぶつけて寝るのを待つ。

そして眠ったのを確認して向かう。

万全を期して、タル爆弾を仕掛ける前に支給品のシビレ罟をエリアのど真ん中に仕掛ける。

そしてティガレックスの頭のそばに大タル爆弾を一つ仕掛けた時だった。

スクアギル「テイガレックス兄貴を守れー！」

ザクツ

テイガレックス「ん？どうしたんや？」

僕「睡眠爆破失敗した!? ええい今からでも印弾使って着火して…スクアギル邪魔すぎるやろ！」

スクアギルに阻まれて大タル爆弾の着火に失敗した僕は破れかぶれになりながら猫虫を使って起爆した。

テイガレックス「痛つけどまだ死なへんでー」

僕「知ってるよ。鬼さんこつちら、手のなる方へ」

テイガレックス「チョーシこくんも大概にしいy…グヌツ!? でも、シビレ罨はその猫のんでだいが慣れたからな…死にやせんで…」

僕「それも織り込み済みさ。行け、モンスターボール（捕獲用麻醉玉）」

テイガレックス「ね、眠たくなって…」

「クエストクリア！」

その後、エリア内のスクアギルを殲滅したのは言うまでもない。

因果応報

さて、大体操虫棍は作り終えてしまった（キリン亜種とゴードンライ以外）
双剣も必要なものは作り終えた。

風化した双剣？めんどくさいです。とても。

そんなわけで僕は狩友（男）と狩りをしていた。

狩友（男）「何行くべ？」

僕「暇や。やることない。イベントのネタ回収しよ。」

狩友（男）「お、おうわかった。」

一応言っておくと僕も狩友（男）も東北出身ではない。

あと、やることないならもうモンハンするなとか思った皆さん？

今夜後ろにヤマタを担いだ操虫棍使いが現れます。

そんなわけで行ってみましょう溶岩島。

少年×2 移動中

僕「さてと、来たよ溶岩島。あ、スキュラ装備で毒無効にしてるから解毒剤は好きにどうぞ」

狩友（男）「お、おう分かった」

ちなみに言っておくと僕の装備はスキュラS一式（小人カスタム）。

具体的に言うとなら、毒無効、捕獲の見極め、腹減り倍加（小）、そしてボマー。

そして食事効果でネコの火薬術。

武器は渾身一体の薙刀ヤマタ。

このあたりでこの後の流れを察した人もいるかもしれない。

ベースキャンブからフィールドは飛び降りるとそこには極大サイズのドスイーオスが2匹。

とりあえず乗り攻撃。

この心構えが操虫棍の基本。(大嘘)

そして乗りダウンを半ば強引に奪う。

僕「よっしや！スタイリツシユボマーじゃ！」

まるで屈伸運動のように小タル爆弾をドスイーオスを囲うように配置。

狩友(男)「は!?何しとん!」

僕「見ればわかるやろ!爆弾魔や!」

狩友(男)「いや、そういうことを聞いているんじゃないんや…」

何だろう、いつも以上に呆れられてた気がする…

そんなこんなで倒れていたドスイーオスが立ち上がる。

そのまま一目散に狩友（男）の方へダツシユ！

狩友（男）「何で2体ともこっちくんねん！」

僕「そりや：ワシがヘイト稼いでないからやろ（ドヤ）いいぞドスイーオスーもつとやれーww」

狩友（男）「威張るな！真面目にしろ！」

僕「はい。」

と言いながら僕は閃光玉を投擲。

場所をうまく調節して二体とも目がくらんだ。

とりあえず先に戦っていた方に切りかかってヘイトを貯めていく。

そしてそのまま離れて戦場を二つに分断する。

狩友（男）「よっしや寝た！」

ガノトトスの武器を担いでいた狩友（男）がドスイーオスを眠らせることに成功！
だがしかし！

僕「あー…手が滑って印弾がー(棒)」

狩友(男)「え?なんでこいつ起きてんの?謎やねんけど。なんでやる?なあなんで?」

そんなに見ないでください。眼光が、眼光が…

その後は何事もなく閃光玉が数回不発になりながらもドスイーオスのトサカを破壊。

狩友(男)「やっと見分けがつきやすくなった…」

僕「えいやー」

ボキッ

僕「はっはっはーこれでどっちがどちかわかるまいwww」

狩友(男)「いや、いいけどな…いいねんけどな…」

その後も目立ったことがなかったので省略。

「残り一頭です」

狩友(男)「こっち終わったわ…」

僕「剥ぎとりたいからそっち終わったらちよつと代わってな」

狩友（男）「あいよ〜」

ドスイーオス「ギヤアツ」

「メインターゲット達成！」

僕「おい…」

「クエストクリア！」

僕「ちよつと待てよ…」

狩友（男）「ん？どした？

僕「ドスイーオスの死体が…」

狩友（男）「死体が？」

僕「溶岩にハマった…」

狩友（男）「え？そんなことないで？」

僕「いやいや…ほら」

そう言つて画面を見せた。

狩友（男）「ほんまやwwwこつちでは普通にはぎ取れたのにwwwバチ当たつたなw

W
└

僕「真顔」

謹賀新年

皆さん、今年は何年ですか？

モブA「猿〜！」

うーん、ケチャワチャでも書いてあげようか？でも惜しい、それはついすぐ前終わったちゃったんだ！

正解は酉年だよ。

ということでクツク先生のところに行きましようね。

どういふことか？

知るかなもん。

僕「樹海〜きたー！」

狩友（男）「お、おう？」

忘れてましたが狩友（男）もいます。彼はこの小説の準レギュラーです。そして彼はこの小説の：

良心です！

僕「そんな事はいいい。俺はストレスが溜まっている。わかるか？」

狩友（男）「う、うん（なんか嫌な予感）」

そんなやりとりはさておいて、イヤンクック。

ちなみにギルクエ上位相当個体である。

僕の装備はボマーをつけたレウスEXシリーズ。

武器は渾身一体の薙刀ヤマタ。

切れ味倍率と爆破属性の底上げで火力重視である。

そんなこんなでクック先生とご対面。

グエッググエッグ
そんな鳴き声だった気がする。

僕「はーい小タル爆弾デリバリーサービスでーっす！」

狩友（男）「ファッ!?!お前またかよー！」

僕「だつて爆弾楽しいし…つてえ!?!クック先生…怯んでる!?!」

狩友（男）「ほんまや怯んでる…今や殴れ！」

僕「頭が…頭が高いよ先生、赤エキスちよーだい」

クック先生「ふうく痛かったわ。もう耳がキンキンするじゃないの…」

僕「まさかの女性キヤラ!?!」

クック先生「うるっさいわねく正月から男だらけなのは…つていう作者の配慮よ！分
かりなさいよ！」

叫ばせてほしい。

「知るか~~~~~!」

クツク先生「ふう、怒り疲れたわ、全く。」

狩友（男）「お、疲労か。殴れ〜」

僕「よし今ココや！小タル爆弾！」

狩友（男）「は？え？もう待って双剣乱舞もう止められへんって」

僕「はっはっは！かかったなアホめえ！」

ちゅどーん

クツク先生「だから…うるさいって…いってるじゃないの！」

僕「ちよ、踏んでる、微量ダメージ入ってるから！」

クツク先生「いい加減にしてよ！うるさいのよさつきから！あんた達ね！静かにしなさいよ！」

僕（狩友（男）がこつちに來たのを見て死角を見計らって無言で小タル爆弾）

ジジジジジ…ドカーン！

狩友（男）「ガツハツ!?てか死にそう!?なんでこんなことになってるんやおい小人」

僕「なあ狩友（男）、NARUTOって知ってるか?」

狩友（男）「急にどうしたよ…」

僕「なあ、デイダ○も言ってただろ?芸術は…爆発や…」

狩友（男）「いや、知るか!あとあいつそんなに大阪弁ちやうわ!てかなんやねん芸術は爆発て!アホかア!」

その後狩友（男）はことある事に爆破され、空を舞いました。

そして約10分後

狩友（男）「よっしややつと眠ったわ」

僕「どうしたん?えらいボロボロやんww」

狩友（男）「お前のせいじゃー…」

僕「まあええやん、とりあえず爆破しようぜ、先仕掛けといたからよろしく」

狩友（男）「1個、2k…」

僕「ファイアー！」

狩友（男）「え、ちよ、」

ドカーン！

「クエストクリア」

その後狩友（男）の「畜生め—————!!」という虚しい叫びが響いたのは言うまでも…あるかもしれない

焼け石に回復薬

ありのまま今起こったことを話すぜ：

アカムトルムが吠えたと思つたら地面が爆発して気がついた時には力尽きていた：

何を言っているかわからねーと思うが、俺も何をされたかわからなかった。

音圧とか紙防御とかそんなチャチなもんじゃねえ、もつと恐ろしいものの片鱗を味わったZ e e：

はいどうも小人です。

フィアルさんのリクエストにお答えして縛りプレイしてたらすぐ一乙しました。

というかもはや回復薬縛りなんて役に立ちませんよね？あれ。だつて：

アカムトルムがワンパンマンなんだもん！

いや、ほんとこれだめだつて。何がって、剣士なのに近づけねえの。攻撃でもなんでもねえ歩行に巻き込まれて死ぬの。踏み潰されるの。

え？何？このあとの展開を知りたい？分かったよダイジエストで行くよ

「とりあえず避けな死ぬから逃げて逃げて逃げて…よし今や攻撃を…あつ、死んだ」

「いや、ほんと勘弁して、アカムさんやめてつて危なつ！おいドリフトしてくんなよ…死緊急回避にたくない死にたくない死にたくない死にたくないとりやー！

よし、何とか躲せ…あ、尻尾きた」

アカムトルム「あれ？ぼくなにもしてないのに、このひとしんじやったよーもつとあそびたかつたなー」

僕「てめえこのやろう…もう1回相手してやるよ」

こうして再戦。再びダイジエストでお送りします。

「今度は咆哮を緊急回避して…よし今やいけ！うまいことアカムの下に潜り込めた！今や大剣の溜め3を…」

「力尽きました」

「え？は？」 ※どうやらアカムの嘔みつき（？）にあたつて死んだ模様

「よし今度こそやつてやる！突進来たな！緊急回避じゃごら！え？待つてドリフトはあかん来んな来んな来んな来んな」

「力尽きました」

「糞が！せめて1発くらい喰らえや！優雅にお散歩か？待てやアカム！グベツ」

「力尽きました」

「踏まれて…死んだ…」

流石にひとりでは無理そうなので。

小人 は 仲間を よんだ

狩友（男） が あらわれた

僕 「なあなあ、かくかくしかじかでアカムに縛りで行きたいねんけど助けて」

狩友（男） 「縛りの内容は？」

僕 「えっと、こやし玉、クーラードリンク、砥石、こんがり肉以外のアイテム使用禁

止、支給品使用禁止、初期防具強化無し、護石&装飾品抜き、武器は大剣一択。」

狩友（男）「ハハッ！（裏返った声で）それは無理やろ」

僕「いや、ネズミーはアカンやつや。やめて？ほんまに」

狩友（男）「こんな時…どんな顔をすればいいかわからないの…」

僕「笑えばいいと思うよ」

狩友（男）「二応聞くけど拒否権は？」

僕「なっいでーっす」

狩友（男）「敢えて言おう。行きたくない」

僕「来ましたよ！溶岩島！」

狩友（男）「あれ？俺の発言権は？」

僕「なっいでーっす！」

狩友（男）「だろうと思っただ知ってた」

とりあえず二人揃ってクーラードリンク。

そしてアカムの咆哮。

僕「このマグマのやつ当たったら即死するから気をつけて」

狩友(男)「いや、何当たっても即死やん…あと身動き取れんから気のつけようがない
というか…」

お願いですから死んだ魚のような目で言わないでください。あつてますけども。

そしてアカムに着実に攻撃しようとする狩友(男)。

逃げ回る僕。

ハンターとしてどちらが立派か、よくわかる映像である。

そして三十秒ほどの時が流れた時だった。

僕「グベツ」

「初代小人が力尽きました」

狩友(男)「いや、何死んでんの？てか三十秒は早いわ〜長そうに見せるために表現こねくり回してるけど《《たった》》三十秒やろ？そんなやつに乱獲されたクシャルダオラ

が可哀想になってくるわ…」

僕「うっ…うう…」

狩友（男）「とうるか大剣溜め攻めすんのはあほやる。当たったら死ぬんやぞ？」

僕「貴方にはわからないでしょうね!!」

狩友（男）「うっわどっかの議員出たわ…」

僕「命懸けで○※△□×…」

狩友（男）「お、落ち着けて明治ブルガリアヨーグルト」

僕「おお、わかった」

そんなこんなで死に続けた。

僕「これ、やっぱ無理なやつやな。」

狩友（男）「それ先に言ったよな!？」

僕「え? そんなの知らないよ? (微笑)」

狩友（男）「いや、登場して数行の時に言ったし」

僕「アーアーキコエナイナー」

狩友（男）「くくくくやろくう!」

僕「ちよ、やめ、リアルファイトはあかん、マジで死ぬ、逝ってしまう!」

狩友（男）「うっさいお前なんか力尽きてしまえ！」

僕「ちよつと上手いこと言っただと思っただやろってイダダダダ！無言でヘッドロックきつくするのやめろ！死ぬ！ああ…おじいちゃん…今そっちに行くよ…」

こうして一匹の小人が天に召され、この世から悪がひとつ減ったとか減らないとか…

それから

~~~~~収録後~~~~~

僕「なあ、狩友（男）」

狩友（男）「ん？どうした？」

僕「諸君私は戦争が好きだ。」

諸君私は戦争が好きだ。

諸君私は戦争が大好きだ。」

狩友（男）「ま、まさかこれは…」

僕「よろしい　ならば戦争ワリツクだ！」

狩友（男）「案の定かい！で、何をすんの？」

僕「縛りがキツすぎるなら、緩和すればいいじゃない？」

狩友（男）「でもそれ小説的に問題ないのか？」

僕「だから本編終了後のおまけにするよ」

狩友（男）「お、そうか。で、どうする？縛り全外しは流石に面白くないやろ？」

僕「うん、だから同じ装備、同じアイテム、同じ状況で武器だけメインで使ってる武器にしよ。てなわけでワシは操虫棍で。」

狩友（男）「なら俺は太刀やな」

そこで少しの間があつた。

僕「What, s?」

狩友（男）俺は太刀を担ぐことにする。」

僕「マルチの時の地雷武器じゃねえか！お前メイン武器ハンマーやろ？ギルカ持つてるし嘘つくくなって！」

狩友（男）「なんでや太刀ええやろカツコいいぞ」

僕「そういうのはいいから。で、本音は？」

狩友（男）「ハンターハンターじゃゴラ！散々人のこと爆破しやがって！仕返しくらいさせやがれ！」

僕「爆弾……ハハッ！（裏返った声）」

狩友（男）「てなわけで俺は太刀〜」

僕「ちよ、ホンマにやめて、あいつの前でこけたら死亡確定やから！」

狩友（男）「私は戦争が大好きだ。」

僕「お前もか！もういいこうなったら最後の手段じゃ！」

狩友（男）「ん？」

僕「太刀担げよ？絶対担げよ？」

狩友（男）「おうわかった」

僕「フリじやボケ〜〜〜プツツ」

「狩友（男）「どうも皆さんこんにちは、何時だろうがこんにちはは、今俺達は溶岩島にいます」

僕「うう…やり返された…うう…そして主導権も持つてかれた…」

狩友（男）「まあ泣くなつて千葉ロツテ」

僕「待つてお前そういう発言はワシの担当じゃn」

狩友（男）「え？」

僕「聞こえへんふりとか…そういう所嫌いやわ…」



僕「グベアツ!?何が…起き…た?」

狩友(男)「小人…!」

アカム「強者は歩くだけで弱者を踏み潰すことが出来るのだよ。覚えておくといい、まあ次に生かせることはないと思うがな。」

狩友(男)「クソが!これでも食らe…あ。」

「狩友(男)が力尽きました。」

僕「クソツタレが…!とりあえず尻尾から緑エキス採集したるわ!」

アカム「無駄なあがきを…弱者が強者を倒すことはない。強者が弱者を刈り取るのみだ…」

「力尽きました」

僕「グツ…なん、だと?今のは…尻尾…か?」

その後、もう一度僕が力尽きました。



狩友（男）「やっぱ初期防具はあかんて〜」

僕「うん、それは思う。」

狩友（男）「てかなんでさつき唐突にシリアス入ったん？」

僕「The, ノリ！」

狩友（男）「だろうと思つた知つてた」

僕「そんな事より！」

狩友（男）「ん？」

僕「もうこのままじゃ腹が立って収まらない！フル装備で奴を討ち取る！」

狩友（男）「これなんていうリクエストだっけ…」

僕「縛りプレイなんてなかった。いいね？」

狩友（男）「アツハイ」

ということまで再再戦。

いつそ再々再戦にしたら君の名は感出て良かったかもしれないなどどうでもいいことを考えながらもはや見飽きた溶岩島へ。

僕の装備は対古龍装備として登録してある、クシヤナ一式に、装飾品と護石で龍属性攻撃＋１と、心眼をつけ、武器はTheチェイサー。

狩友(男)はジンオウU一式に武器はハンマーだったことを覚えている。詳しくは覚えていない。

アカム「また来たのかコバエ共め…まとめて駆除してやろう…」

僕「うっさいんじや死ねやゴラ！」

アカム「良いだろう…私の本気を見せてやろう…これが…ソニックブラストだ！」

僕&狩友(男)「どんな攻撃も…当たらなければどうということはないのだ！」

アカム「何!? 躲したというのか!?!」

僕「そして…どんな敵も…」

狩友(男)「殴れば死ぬのだ！」

そんなこんなでアカムは撃破しました。十分針で、割と余裕がありました。

リクエストに半ば添えない形になってしまつて申し訳なく思っています。ファイアールさん、申し訳ございませんでした。

## 骨折り損のくたびれ儲け

おつす！オラ小人！元気にしてたか？

オラか？オラは今…

キシャー……！

千剣山についたところだぜ！

ソロでダラ・アマデユラを狩れるか試してみるんだぜ！

一番最初の登場時の巻付きは短くて時間がもつたいないから尻尾に攻撃をするぜ！

ちなみに狩ることを目的としているので部位破壊はそこまで重要視しないぜ！

まあ大ダウンが取れるからなるだけやるけど尻尾はダメージ効率悪いからな！やらないぜ！

……あー疲れた。

某シューティングゲームの普通の魔法使いの口調で喋ってたら疲れたぜ：  
口調移っちゃったぜ：

そんなわけでとりあえず尻尾攻撃。

乱舞は使わずに回転切りで着実に鬼人ゲージを貯める。

つと移動か。

とりあえず移動先行くぜ！

あ、また口調が魔○沙になった。

相手の動きが止まって、定位置に止まったら下から二段目の足場に乘ってジャンプ攻撃をします。

ネットで知った情報なんですけどダラ・アマデユラってジャンプ攻撃の怯み耐性初期値5らしいですね。

なので最初のジャンプ攻撃は必ず怯みません。

そして飛び降りた先の段から更に動かなくなった頭にジャンプ攻撃！

そのまま乱舞！



コビトです…

三角定理スイッチみたいにな…流れるように瀕死になったとです…

コビトです…コビトです…コビトです…

「と、とりあえず回復薬プレート×2飲まねえと死ぬ！」

と、アイテム使用をしようとした瞬間に咆哮。

泣いてもいいですか？

ちなみに装備は、ジンオウS一式にTheeアポストル、スキルは業物、力の解放+2、龍属性攻撃+1、心眼、そして死にスキルとなつてしまった雷属性攻撃+1です。

と、説明している間にダラ・アマデユラは地中へ。

ブレスの薙ぎ払いを逆方向から2連発と噛みつき1回のハッピーセットを無事に回避。

巻きついたので体の上へ。

頭を狙ってジャーンプ。

そして攻撃！

「なんでこのタイミングで怯んだし…ダウンしたし…」

振り落とされました。ありがとうございます

とりあえずややくそ気味にダラ・アマデユラの口内を蹂躪

え？意味深に聞こえた？

実際の所グチャゴチャザザブツツって感じじゃないですかね？うわーえげつない。(他人事)

まき付きの時間が残っていたのかダラ・アマデユラが再び巻きついたので頭への到達を諦め、第二の弱点である背中へ。

背中を第一段階破壊してヒビだらけのボロボロにします。

ここでタイムリミットのようなので、メテオも届かない酸性の沼地へ飛び込み、下半

身などを切り刻みます。

部位破壊ができればラッキー程度に考えましょう。

移動後ダラ・アマデユラは高台側に行き、高台に右爪を置いたのでそこを本格的に叩きに行きます。

その高台はメテオ以外のほとんどの攻撃が届かないすごい安全地帯なので攻撃に専念でき：

ドカーン

メテオが降ってきました。フラグ回収早かったなあ：

もう一度高台へ登って爪を攻撃。

右爪が砕け散り、ダラ・アマデユラがダウン。

頭を切り刻みにかかります。

起き上がったダラ・アマデユラは、一度地中へもぐりました。

またあのハッピーセットかと警戒しましたがそうではありませんでした。

敵の体力が一定以下になった合図になる地形変動です。

この時15分針。



これは勝てるかもしれない、そう思った瞬間でした。  
僕の闘争心に火が付きました。

そこからは長かったですですが集中していたからか早かったです。地形を破壊して満足したらしいダラ・アマデユラは千剣山に巻き付きます。

そんなダラ・アマデユラの頭に容赦なく僕は対巨龍用爆弾を仕掛け、自分でも攻撃します。

あまりのダメージにひるんだダラ・アマデユラに容赦なく乱舞を浴びせ。

メテオから逃げ回りながら爪やら胸郭やらを破壊して。

四十分弱が経過した頃。

「メインターゲットを達成しました」

「あと一分で帰還します。」

そして僕は叫んだ。

「頭どっこじゃーーーーー！！！」

小人、剥ぎ取り回数4回。

「・・・て・・・と！」

## 三十六計乗るに如かず

僕「狩友（男）よ」

狩友（男）「ん？唐突にどうした？」

僕「いつもありがとう」

狩友（男）「お、おう。」

僕「いつも世話になってるからな。こちらもお礼することにするよ。ピツケルと虫あみ持って集会所来て」

狩友（男）「OK。集会所来たよー！」

僕「ほな行こか」

少年達移動中

狩友（男）「いや、おい」

僕「ん？何？どうした？」

狩友（男）「どうして目の前にレベル77のゴア・マガラがいるんですかねえ!？」

僕「だってギルクエだもの」

狩友（男）「やつぱりこいつのお礼なんか信用するんじやなかったー！」

僕「いや、お宝エリア出てるし歴戦の防具&武器回収がてらゴアチャレンジしようと思っただけだよ？ 他意はないよ？」

狩友（男）「おい目をあわせろ、逸らしてんじやねえ」

僕「ま、まあリタイアしなければお宝は持って帰れるから。ね？ ね？」

狩友（男）「やるだけやって見るか…」

そして時は動き出す…

狩友（男）「エリホス頂き！」

僕「とりあえずエキスう！」

そんな2人にゴア・マガラは咆哮する。

僕「所詮咆哮なんざ距離を取れば効果などない！ そして咆哮が効かない位置からも猟

虫は当てられる！」

狩友（男）「なんだただの変態か」

僕「ちよ、カッコよく決めたのに。いいもん！ハイパーモード！」

トリプルアップ状態になった僕はゴア・マガラの股下に潜り込む。

無防備な股下にいる外敵を感知したゴア・マガラはブレスを吐いたり激しく動いて僕を振り切ろうとするが、回転回避で位置取りは崩れない。

狩友（男）「このブレスって当たったら瀕死か即死だよな？」

僕「ま、そうだろうな」

狩友（男）「でもまあ」

僕「うん」

狩友（男）&僕「当たらなければどうという事は無い（よね）！」

僕「よし怯んだ！今のうちにジャンプ！ソイヤツ！」

空中で操虫棍を振り回し、背中を二回切る。

まだ乗るには至らない。

僕「あ、ハイパーモード切れる。エキス取らねば」

と、股下から一時的に離脱した僕に、ゴア・マガラはこの時を待っていたとばかりにブレスを吹き付ける。

それを避けるすべは僕にはない。

股下で少しづつ削られていた分のダメージもあつて僕はBC送られることとなった。

狩友（男）「え、ちよい、俺も死にそうなんだが」

僕「肉食べて武器研いだら戻るからちよつと待つてて〜」

狩友（男）「畜生め！」

そうこう言いつつゴア・マガラの猛攻を僕が合流するまで耐え凌いだ狩友（男）。

僕が戻った瞬間ゴア・マガラは僕の方を向いた。

僕「なんでこつち見るのかなあ？」

狩友（男）「挑発スキル付いてるからだよ！」

僕「挑発ほんまあかんで。ヘイトの溜まり方が異常。」

狩友（男）「こつちは狙われへんから楽やけどな」

そんなことを言いつつ股下ザクザクしていたらゴア・マガラが狂竜化した。

僕「ここからが勝負やねんなあ」

狩友（男）「ん？」

僕「動き早くなって股下潜り込んでもあつという間に抜かれるし、1発1発威力上がるし。てか即死になるし」

狩友（男）「だろうと思った知ってた」

僕「でも策はある」

狩友（男）「お？」

数分後

僕「ゴア・マガラは3、4回ジャンプ攻撃当てたら乗れる！そしてそのタイミングで全火力を頭にぶつけられば！」

ゴオヴ！と声を上げてゴア・マガラが怯む。

角は折れ、紫の光が点滅している。

狩友（男）「なんだやつぱり変態だったか」

僕「頭に攻撃を当てれば狂竜化解除出来る！ぶち込め！」

狩友（男）「スルーかよ…簡単そうに言うがそれが難しいんだよつと！」

僕「ぐうれいと！解除完了！」

オトモ「今なら捕獲可能ニヤ！」

僕「捕獲可能！あともう少し！気を抜かずに行くぞ！」

僕「股下股下ア！」

狩友（男）「頭寄せえ！」

ダメ押しとばかりに狩友（男）がスタンを取る。

僕「ぐうれいと！ナイススタン！どうおりやあ！」

「メインターゲット達成！」

僕&狩友（男）「よっしやああ！」



お・  
て、  
・  
・  
こ・  
と  
!

## 二度あることは三度ある

どうも小人です。

なんやかんや言いながら千剣山でのロケも三回目。

さてどうして僕がこんなふうをやたらと千剣山に来ているかと言いますとですね…

祝！小人ハンターランク1000到達！

まさかここまでやりこむとは思ってもみませんでした…

そしてその時に出た言わば集会所のラスボスとでも言うべきクエスト、それが！

狩友（男）「千古不易を謳う王、ダラ・アマデユラ強化個体のクエストやね」

僕「なんで先言うん!?もったいぶって1000行くらい引き延ばそうと思ったのに  
！」

狩友（男）「長いわ！あとなんで先に言うか？そんなもん決まっとるやろ」

そこで狩友（男）は息を吸った。

狩友(男)「お前の俺に対する扱いひどすぎるんじゃないや！爆破したり爆破したり人がせつかく掛けた睡眠をパーにしたり唐突の無茶振りしたり！（気になる人は9話、10話、14話を見てください）挙句の果てに最終話とか」

僕「落ち着け、今までのことは謝るからネタバラシは止めろ、死ぬ。今から書き直す余裕とかないから。な？頼むから落ち着いて？」

狩友(男)「分かればいいのさ分かれば」

それはともかく、と狩友(男)は言葉が続けた。

狩友(男)「なんで俺千剣山にいるの？」

僕「いや、ダブルクロス出たらどうせ4なんかやらんくなるやろ？その前にハンターランク100行っとこ？ほらポイントも高いからこのクエスト」

狩友(男)「お前勝ったからもうええやん！俺やらんでも！ハンターランクとかもうええねんって！」

僕「さてやって参りました千剣山。もう早くも3度目の収録になります。僕は1日1

アマデユラを心がけているのもう何度来たか分かりません。」

狩友(男)「ほらな！お前絶対反省してないやろ！？さっきの！あと俺は1日1アマデユラとかいう廃人じゃないから！もうテツカブラ倒して喜んでたあの頃のお前帰ってき  
てくれや…」

僕「いや、まあ強化個体つってもそんな強くないやろ？ほら、俺護石と装飾品で龍属性  
攻撃+3やし。」

皆さんお気づきだろうか。

小人が油断し、余裕発言。

これは死亡フラグである。

僕「よっしゃクエスト開始！つてえ？いきなり噛みつき!？」

狩友(男)「小人……!？」

僕「いった…これ割とマジでヤバイやつ。くつそ…勝った時はこれ被弾しなかったか  
らここまでやばいとは気づかなかった…」

そしてその後も…

僕「チャージブレスか…え!? こっち狙ってたん!」

ドカーン

僕「ちよ、メテオ多い多いつて狩友(男)の方全然狙われてないやん!」

ドーンドーン

僕「これは流石におかしい! 妖怪のせいだ!」

狩友(男)「んな訳あるか! 理由なんぞ一つやろ! ステータス画面見てみる!」

僕「え? おう…は!? 何で挑発なんかついてるん!」

聡明な読者様方ならもうお気づきであろう。

僕はジンオウSシリーズを装備してよく狩りに出る。

特にダラ・アマデユラ戦で双剣を使う場合、力の解放+2と業物のスキルが双剣の特性によく噛み合つてとても強い。

その反面、この装備にはバッドステータスとして、「挑発」というスキルがついている。単に狙われやすくなる、ただそれだけと言えばそれだけのスキル。

二人でプレイする際には敢えて挑発をつけてクエストに行き、適当に僕が逃げ回つて狩友(男)がダメージを与えと言った戦術も可能ではある。

しかし、ことダラ・アマデユラ戦において、狙われるということは自分に降り注ぐメテオの量が増えるということ。

メテオが多ければ避けきれず被弾することも多くなり、ましてや強化個体では1発1発のダメージもかなり大きいこともあつて…

「初代小人が力尽きました。」

狩友（男）「小人………！」

僕「挑発スキル…恐るべし…とりあえず今戻る」

狩友（男）「え、今噛みつきが」

僕「え？もう来てる」

「初代小人が力尽きました」

ここに宣言しよう。

死亡フラグは回収された！

その後の展開はご想像におまかせするが、狩友（男）は未だハンターランク1000に

到達していないとだけここに記しておこう

お・て！・き・こ・と！

## 盛者必衰

はいどうも、みんな大好きハンターランク100越えのモンスター（が）ハンターです。

あれ？名乗りの部分に何か混じった気がする。

変だな…

ま、いいや。

今回はですね。

探索に行こうと思います。

痛い痛い、やめて、石を投げないで

え？何？いつもグダグダハンティングな小人が探索なんかいったらグダグダの二乗で目も当てられんだろって？



……返す言葉もございません

いやあの！アレですから！別に上位探索サバイバル耐久ゲームとかやるわけじゃありませんから！

別にやってもいいですが！

ゴホン！

今回やっていくのは。

イヤンガルガマラソンです。

そこ！露骨に嫌な顔をしない！

てか今誰と会話してんの!?これ！

??? 「私だ」

お前だったのか

??? 「また騙されたな」

全く気づかなかった

茶番はもういいって！

ほらもう集会所ですつと喋ってるやんか！

ほら行くよ！

はいどうも、未知の樹海からお届け、初代小人の、オールナイト探索です！  
なんでオールナイトなのかって？

ラジオ番組に因んだんだよ！

まだイヤンガルガマラソンの目的を言ってませんでしたね。

モンハン4で唯一の氷属性操虫棍は、キリン亜種の素材を使うんですけれども。

前回クリアした千古不易を歌う王クリアしないとギルクエが派生しないんですよ

…結局こんな時期に作るハメになっちゃいました…

え？ヤマタあるなら要らなくないかって？  
シーツ！

はい、イヤンガルルガに見つかりました。  
携帯食料類もちゃんと回収しましたよ。

とりあえずバインドボイスの前に赤エキスを確保。  
続いて黄色エキスも確保。

した迄はいい。

白エキス翼だけなの？足も白にしようよ！翼の位置が微妙に高いせいで取れやしな  
い！

とりあえずマーキングして…猫虫発射！

羽ばたくなや!!!

ごらこのク○ガルルガ！いい加減にしやがれや！

はよ白エクスよこせやゴラ！

ふう、やっと取れました。

つてあれ!?安心したらサマソされた！

大ダメージやんけ！

毒にもなったし：

つてあれ？ヤツベ：

解毒薬忘れた：

おわかりいただけただろうか

猟虫の労力を無駄遣いするような汚いプレイング。

モンスターに人権があれば確実に訴えられるレベルの低俗な言動。

そして初心者のようなミス。

いくらハンターランクが上がろうとも、プレイ時間が400時間を越えようとも、小人が下手くそであるという事実は、太陽が東から登るように、変わらないものなのであ

る。

僕「ナレーションうるせえ！」

自演乙

僕「メタ発言はよぜ！」

で、その後どうなったの？

僕「…しました…」

え？なんて？

僕「一乙しましたよ！畜生め！」

んで、「モンスターが逃げ出しそうだ」って出てるけど大丈夫なのか？

僕「え!?!やばいそれは」

慌ててイヤンガルルガを追いかける僕。

無情にもイヤンガルルガは飛び立ち、新天地を目指してどこかへと消えてしまった。

僕「クソツタレがー！ー！」

おわかりいただけただろうか

400時間プレイし、ヤマタを担いでいる関わらず一乙した上標的を取り逃すプレイング。

読者の寒気を誘ってしまったことを、ここに心からお詫び申し上げよう。

僕「いいもん！落し物拾ったもん！拠点戻るよ！」

そしてギルクエは…

出なかった。

その日丸一日モンハンし、やっと出現したことをここに記すでしょう。

キリン亜種を出現させ、力尽きた僕に、別のクエストをちょうど終わらせた狩友（男）が言った。

狩友（男）「小人、そろそろ帰る時間だ。」

僕「え？何を言ってる…」

狩友（男）「束の間だったけど、思ったより楽しかったぜ。もう当分こっちに来んじやねえぞ？もしすぐに来やがったらタル爆で永久に吹き飛ばし続けてやるからな？」

狩友（男）はそう言って、僕の肩を強く押した。

そして、僕は、いつの間にか空いていた大きな穴の中に吸い込まれて行った。

小さくなっていく狩友（男）の、哀しそうな微笑みが、やけに脳裏にこびりついていった。

そして穴の中でいやに明瞭に、「起きて！起きて！小人！」という女性の声が聞こえた。

## 終焉

w a r n i n g ! w a r n i n g !

視界が赤く染まる。

サイレンが鳴り止まない。

うるさくて仕方ないのに止め方がわからない。

そして僕は…僕は…あれ？

目が覚めた。長い夢を見ていた気がする。

何か、大切なものを忘れているような、そんな途方もない虚無感に襲われて動けなくなる。

「目が覚めたのね!?大丈夫!？」



見知らぬ女性が僕がいる部屋に入ってきた。

「小人！小人！どうしたの？そんな顔して！」

女性はヒステリーを起こしたように僕の体を揺する。

「もしかして…私のことが分からないの!?!お母さんよ！あなたのお母さんよ！そんな、そんなあ…」

そう言つて彼女は泣き崩れた。

お母…さん？

ちよつと待ってくれ。

僕の…正体は？僕って何者だ？

ぼくは…ボクは？ダレ？

分からない。

ワカラナイワカラナイワカラナイワカラナイワカラナイワカラナイワカラナイワカラナイワカ

ラナイワカラナイワカラナイワカラナイワカラナイワカラナイワカラナイワカラナイ  
ワカラナイワカラナイワカラナイワカラナイワカラナイワカラナイワカラナイワカラ  
ナイワカラナイワカラナイワカラナイワカラナイワカラナイワカラナイワカラナイワ  
カラナイワカラナイワカラナイワカラナイワカラナイワカラナイワカラナイワカラ  
イワカラナイ…

そんな時、声が聞こえた気がした。

「てめえ！俺をギルドのヤツらに売っという腑抜けんな！しやんとしろや！」  
「そうだよ…僕を下した君は紛れもない強者だ。自信を持つんだ。」

そして、一際大きな声があった。

「強く生きやがれ！爆弾で俺を吹き飛ばしたお前はそんなもんだったのかよ！」

なんだろう、少し自信がついたような気がする。そして、懐かしいような気がする。

それからの日々は流れるように過ぎた。

俺はどうやら暴走車に突っ込まれて吹き飛ばされたらしい。

生きているのが無事なくらいの重傷だったらしい。

どうやら一緒にいた友達が車との接触直前に助けてくれたらしい。

その友達は…残念ながら助からなかったそうだ。

それから俺は二ヶ月の間意識不明だったそう。

記憶はまだ戻らない。俺の名前は初代小人というらしい。

そして、数ヶ月の療養とリハビリの後、無事退院することが出来た。

家に帰ると、ゲーム機が机の上にぽつんと置いてあった。

半年近く充電をしていなかったはずなのに、何故か電源は入ったままだった。

パカリ、と開いてみた。

モンスターハンター4というカセットが入っていて、集会所とかいうところが画面に映っていた。

そこにはふらつとハンターとして狩友（男）というプレイヤーがいた。  
「ああ……あ……う……」

全てを思い出した。

今までの人生、事故の瞬間。

そして…

眠っている間の狩猟生活。

ゲーム機は役目を終えたようにプツリと電源が切れた。

そうか、俺は、狩友（男）に二度助けられたんだ。

そして狩友（男）はもう先に逝ってしまっているのだ…

俺は誓う。

狩友（男）の分まで、強く、長く生きると。

そして、アイツみたいにかくさんの人を助けられる立派な人に、絶対なつてやる！

T  
h  
e  
  
e  
n  
d

## ドンドルマ編

## 復活

夏休みが始まってすぐの日。

僕「これ下さい」

店員さん「〇〇円になります」

僕「10000円で。」

店員さん「お釣りが××円です。ありがとうございました」

く小人帰宅く

僕「遂に…ついに買ってしまった…」

僕「モンスターハンター4Gを!!!」

そう、この小人は受験生であるにも関わらず、しかも発売後数年も経った今の時期にモンハン4Gを買ったのである。

馬鹿ではないのだろうか？という読者の疑問に大きな声で応えよう。

そう！この小人は馬鹿なのだ!!!

それはともかく  
閑話休題

ゲームを買ったのだ。

やることは一つしかない。

僕「バースト・リンク！」

そんな訳でオープニング再生後に諸々を設定。

プレイヤーの見た目を女性にすることも忘れない。

小人は気づいてしまったのだ。

女アバターの方が防具が可愛いことに。

設定を完了。

いよいよ起動する。

僕「うっわ懐かしい：帰ってきたよバルバレ！ただいま！つてうっわハンターランク106スタートかよ」

4から4Gにデータ引き継いでもハンターランクつてそのままなんですな。

そんな事をしていたらキャラバンの団長さんに捕まった。

団長「ちよつとドンドルマ壊滅の危機らしいんだけどお？助けてくんね？みーたーいーな？なんかお前の力が必要だ！的なの？そんな感じらしいからさ、来てくんね？」

どうやらこの作品内では団長はフランクな感じらしい。



そんな感じでドンドルマへ

僕「うわっ！ドンドルマだ!!あの！ドンドルマ！数々のモンハン二次創作作品で登場してた！あの！ドンドルマ！」

こんな感じでテンションアゲアゲで居るとそこには筆頭リーダーが。

筆頭リーダー「少し困っているんだ。ダイミョウザザミ一匹を狩猟してきてほしい」  
僕「アイアイサー」

く小人移動中く

僕「ここは…旧砂漠？4Gで追加されたのか？なんか感慨深いなあ…つてやらかした!!!」

飯食い忘れた!!!

まさか新しく買ったソフトで最初のクエストでいきなりモンハンあるあるをやらかすと思わなかった…と、意気消沈。

僕「ま、まあ、蟹くらい大丈夫だよな、つてペイントボールも無エ!!だ、大丈夫だよな、多分。そうそう、蟹工船蟹工船」

などと訳の分からない事を言いつつ初期エリアのエリア3へ。

そのまま戦闘開始。

下から突き上げて襲ってくるダイミヨウザザミから逃げ回りながら攻撃。埒があかない、とダイミヨウザザミはハサミを振り回して攻撃してくる。

僕「こんな時は…エア回避!」

僕を嘲笑う声がどこかから聞こえた気がした。

「ぎくんねん、ここは4Gなので、エア回避なんてありませーんwwwwww」

僕「ヌボツ!」

完つ全に忘れていた小人。

僕「ま、ブレイヴだと思えばなんとかなるだろ」

ダイミヨウザザミ「は?」

僕「爆破爆破爆破ア！最近リア充共がクソ腹立つんじやゴルア！」  
ダイミヨウザザミ「そんなもん知るかー！ー！」

小人のドンドルマ生活最初のクエストは、数々のアクシデントの中、五分針で終わったことをここに記す。